



養蚕手業選<sup>かひび</sup> (明治23年 (1890)) 画工発行人日本橋区馬喰町荒川藤兵衛 (縦36cm×横25cm)

【左】明治時代の養蚕作業の様子が描かれています。手前の人、卵からかえったばかりの蚕をはき立て羽根で種紙からかごに移す作業をしています。かごは竹で編んだ平たい蚕を飼う用具で、右奥のように棚に何枚もさして使いました。奥の人は、摘んできた桑の葉を蚕に与えています。



蚕やしない草 (明治42年 (1909) 10月30日) 東京市浅草区牧金之助発行 (縦35cm×横26cm)

【右】養蚕農家は落葉樹である桑の葉がえさとして使える5～9月の間に蚕を育てました。蚕が孵化してから繭となるまで、35～40日ほどかかります。その間、品質のよい繭を作るために、農家の人は蚕の世話をしました。この時代の群馬県は、繭生産量では全国2位、農家戸数に占める養蚕農家の割合は7割近くと養蚕の盛んな県でした。